

ホンダラケ

2019.4.1

人の数だけ人生あり。今月の特集は「伝記」です。定番の偉人から大人気のくまモンまで、色々な人の生き様に触れられる本を紹介します。

こんな人、知ってる？



ドミトリーともきんす

高野文子：著 中央公論新社 2014年刊 726.1/14



もし、偉大な科学者たちが学生のころ、いっしょの寮に住んでいたら……。想像の寮、ドミトリーともきんすの住人－朝永振一郎、牧野富太郎、中谷宇吉郎、湯川秀樹－と寮母のとも子さん、その娘のきん子ちゃんとの交流をマンガで描いた作品。4人の遺したエッセイなどが紹介されており、彼らの考え方に触れるとともにもっと彼らのことを知りたくなります。現実とフィクションが混じり合ったような不思議な作品です。

ホンダラケとは

本誌は、読者の身も心も「本だらけ」にしてやろうという心意気から生まれた中高生向け小冊子です。本誌に登場する本は全て三田市立図書館本館のYA（ヤングアダルト）コーナーでご覧いただけます。

2か月に1度、年6回発行予定です。

ホンダラケは皆様の投稿をお待ちしております。YAコーナーに用紙・ポストがございますので、おすすめ本や本誌の感想・要望などお寄せ下さい。

青春読書記

～三田学園図書委員会より愛をこめて～

今月のテーマは「卒業」。

ホンダラケと三田学園がコラボした当初からいた生徒さんたちが、今回で卒業です。

ホンダラケとのコラボが、いい思い出になってくれるといいな。

今まで、たくさんの本を紹介してくれてありがとう！

ペンギン・ハイウェイ

森見登美彦：著 2010年刊 KADOKAWA F/モリ

春の始まりのこの季節には少し似合わないですが、今回は夏のお話を。

小学四年生の「ぼく」と「ぼく」が恋しているお姉さん。

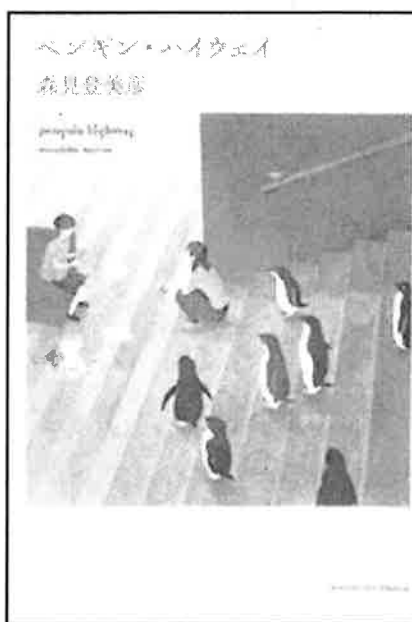
二人は夏休み突如出現した謎の物体「海」についての自由研究を進めていく。また、町にはアデリーペンギンが行進を始める「ペンギン・ハイウェイ」という不思議な現象もあらわれていく。

映画化もされた本作は「ぼく」の一人称視点での語りが特徴。少し小生意気な語りが小突きたくもなりますが、お姉さんへの想いはやっぱりピュア。(不純な単語を連呼したりするけど…)

この本を読んだ当時、私は中学生だったのですが、「ぼく」を追っていくうちに小学生の頃の夏休みが懐かしくなりました。

二人の切ないラスト、是非ご覧ください。

P.N.センボク (高校2年生)



卒業する図書委員さんから一言

図書館展示から旅立っていく先輩を見送るうちに自分が旅立つ側になりました。こちらの司書さんたちに何度も助けられ、私が中2の頃から始まったホンダラケ。これからもユニークな後輩たちのユニークな展示をお楽しみに！
本当にありがとうございました。

センボク

3年間ありがとうございました。図書館のYA担当の方や他の委員会メンバーのおかげで毎回クオリティーの高い展示ができたと思います。これからも多くの方に棚を見ていただけると嬉しいです。

レモネード

リサイクル予備軍

⑮

ぼくはマサイ ライオンの大地で育つ

～なぜ君は借りてもらえないのか～

ジョゼフ・レマソライ・レクトン:著 さ・え・ら書房 2006年刊

この本の作者はケニアの遊牧民の村に生まれた少年でしたが、教育を受けてアメリカの大学で修士号をとるまでになった人です。

まずもくじから見てみましょう。「第一章 ライオン狩り」…もうすでにスゴいですね。ケニアっぽさがにじみ出ていますね。他にも、マサイの子供たちがどんなおままごとをして遊ぶのか、彼らが連れてくる牛のこと、学校から帰るときは遊牧民の家族の居場所を探し当てるまで下校が続くこと……などなど、リアルなマサイ族の暮らしや感覚を読むことができます。アフリカで生きてきた筆者が初めて飛行機に乗ってアメリカへ旅立った話など、みどころはたくさん。ぜひ、レクトンさんの人生を読んでみてくださいね。



289.3/レク

YA世代のために血を吐く思いで名作を紹介するコーナー

『華岡青洲の妻』 有吉佐和子 著

新潮社 1987年刊

もうあなたが飲む必要はないと違いますが。さあ、それはどうですやろかのし。

華岡青洲というのは世界で初めて全身麻酔による手術を成功させた人なのですが、実はこの素晴らしい偉業は、青洲の妻・加恵と青洲の母・於継の献身的な協力があったの事という美談になっています。が、本当のところを想像して小説にしてみたのがこの本。麻酔の効果確認には人体実験は避けられない。その時、母と妻は「私を！」「いいえ私を！」と競って実験台に我が身を差し出す。しかしその腹の内には、青洲をめぐるの根深い嫁姑の確執が潜んでいるのだ！感動もあるけれど、ちょっと将来お嫁に行くのが不安になっちゃう女子もいるかも。



F/アリ

～イチオシ偉人伝はありますか～

F「というわけで、今回は伝記をテーマに対談をしていくのですが…」

M（忙しく仕事をするMさん）

A（忙しく仕事をするAさん）

F「うーん、もはや忙しすぎて、二人ともY Aの時間にY Aの仕事ができない事態になってしまった。たいへん」

M「(PC画面を見つめながら) アンタはいいわねっ気楽でっ！！」

F「うん、もうお二人は他の仕事しながらでいいや。なにか面白い偉人伝ありませんか？ 小さいころ絶対読んでいたでしょ？」

A「(何やら重要そうな書類を書きながら) そ、そんなざっくりと！？ 私はキュリー夫人とか読んでましたが…」

F「あ、私もキュリー夫人はお気に入りでした。ピエールとの絆がいい！」

M「私さー。小さいころ、祖父から「Mちゃんには偉い人になってもらいたい」って、『えらいひとのおはなし』っていう本をもらってね…幼心にプレッシャーを感じたのをよく覚えてるわ」

A「昔は伝記といっても限られた人のものしかなかったですよ。絵も今ほどキラキラしてなかった」

F「伝記といえば亡くなった人というイメージだったんですが、今は生きている人の伝記も児童書で出ていますよね。イチローさんや浅田真央さんや…」

A「ネイマールさんや松井秀喜さんや…」

M「くまモンとかね」

A「そう、くまモ……**くまモン！？**」

M「そうなの。出てるのよ、くまモンの伝記が！しかもマンガ」

F「よし、展示しましょう。他にお二人、何か好きな偉人はいますか？ほら、憧れた生きざまとかあるでしょ？Aさんはどんな生きざまに憧れるんですか？」

M「壊れたバイクで走り出すような生き方？」

F「……事故っちゃう。やめて。それ、盗んだバイクで走りだすの間違い」

A「(爆笑)」

M「間違えた。でも盗むのもダメよう」

F「Mさんはあこがれの偉人というか、生きざまはありますか？」

M「基本的にね、ムーミン谷の人の生きざまはみんな好きよ。自由で」

A「自由を求めているんですね（もうこんなに自由なのに）」

M「あれ、変な副音声聞こえたような？」

F「さあ、今月ムーミン谷の人々の伝記は展示されるのか！？
どうぞ期待！！」

